

横顔
就任インタビュー



安心できる周産期医療 離島や遠隔地に拡充

国産手術支援ロボット「ヒノトリ」を用いた世界初の婦人科手術を手がけた鹿児島大学医学部産科婦人科学教室。2026年5月、戸上真一氏が教授に就任した。離島を含む全県で安心して出産できる体制を整える。

鹿児島大学医学部 産科婦人科学教室

とがみ しんいち

戸上 真一 教授

2001年鹿児島大学医学部卒業。同大学医学部附属病院、国立がんセンター中央病院(現:国立がん研究センター中央病院)、鹿児島大学大学院医歯学総合研究科生殖病態生理学准教授などを経て、2026年から現職。

鹿児島大学医学部 産科婦人科学教室
鹿児島市桜ヶ丘 8-35-1 ☎099-275-5111(代表)
<https://www.obgy-kagoshima.jp/>

ヒノトリで世界初 子宮体がん手術

五つの診療科が協働する鹿児島大学病院のロボット手術センター。なかでも同教室はけん引役を担う存在だ。2022年、国産手術支援ロボット「ヒノトリ」が婦人科領域で薬事承認されたことを受け、同教室は

同年12月、ヒノトリを用いた世界初の子宮体がん手術を実施した。

第6代教授に就任した戸上真一氏は婦人科腫瘍を専門とし、ロボット支援手術などの最小侵襲手術(MIS)に積極的に取り組んできた。「ロボット支援手術の魅力は、低侵襲性とラーニングカーブの短さ。ただ、

日本産科婦人科内視鏡・ロボティクス学会のロボット技術認定医は鹿児島県には3人しかおらず、現状の改善が必要だ」世界的に婦人科領域では開腹手術からMISへの転換が急速に進んでいるという。そうした流れの中、同院でも最先端のロボット支援手術を提供できる体制づ

くりを進めている。「常に新しいロボット支援手術を取り入れ、鹿児島大学から最先端の医療を発信していきたいです」

適材適所の配置で 県全域の体制整備

鹿児島県は離島が多く、有人島だけでも28ある。分娩施設がもともと無い島に加え、今後の維持が難しい施設も多い。少子化により県内の年間出生数が1万人を切っている点を含め、見通しは厳しい。

「分娩の保険適用など、大きな変化が数年の間にあるかもしれませんが。そのような時代の中で、鹿児島県全体の周産期医療を守り抜くことも使命と考え、従来通り、必要な場所に適切な人材を派遣する体制を強化していきます」

同時に一人一人の働き方にも目を配る。女性医師の比率が高い診療科だからこそ、妊娠や出産でキャリアを断念しなくてよい持続可能な労働環境を追求する。目標は性別を問わずライフステージに応じた働き方ができる仕組みづくりだ。

「当教室では周産期、腫瘍、生殖内分泌、女性ヘルスケアの4領域を高いレベルで学べ、サブスペシャルティも取得できます。教室員が産婦人科医として長く活躍できる場所を提供できたらと思っています」

助け合い挑戦する 伝統を次の世代へ

研究面において同教室は、センチネルリンパ節生検の研究を強みとしてきた。戸上氏も約10年にわたる携わってきた保険収載のための活動は26年度の診療報酬改定で実を結んだ。

「子宮頸がん、子宮体がんにおけるセンチネルリンパ節生検が保険適用となりました。従来の手術より術後QOLの飛躍的な向上が期待できます。さらに技術をブラッシュアップし、全国に広げていきたい」

精力的な活動の土壌は、おらかな気風の教室にある。「先輩方が築き上げてきた、助け合いと意欲的な挑戦を尊ぶ教室文化があります。自由度の高い環境は何物にも代え難い宝です」

伝統を次世代へとつなぎ、「育ててもらった恩返しをしたい」と話す戸上氏だが、都市部への人材流出など地方大学特有の課題は避けて通れない。教室説明会やセミナーには工夫を凝らし、告知ポスターのデザインは若い教室員のセンスに任せているという。

少子化の波をどう受け止めるか。「分娩数は減りますが、産婦人科医の役割は小さくなりません。大学としては、日々の臨床での疑問を研究へ発展させるフィジシャン・サイエンティストを育てていきたいです」